

竹中「不可能に挑戦していくことこそ、発展の種があります」
高橋「新しいことに挑戦していくことが楽しくて仕方ありません」



が、一九九八年、ちょうどプロ
ブ・ステーションが社会福祉法人
化した頃、「信頼する部下が課長に
なったから」と、紹介してくださ
ったのが村木厚子さんでした。

高橋 ああ、厚労省で事務次官を
務めた。

竹中 さっそく村木さんにプロ
ブ・ステーションの取り組みを書
いた本を持ってご挨拶に伺いまし
た。そうしたら、忙しい中一晩で
読んでくださり、「これで私も上司
と闘えるわ。なぜなら女性が働き
にくいということ、障がい者が
働きにくいということは同じ。一
緒に日本を変えましょう」と。

高橋 心強い方ですね。

竹中 それで厚子さんも「障がい
者が在宅でも働けるように」とい
うテーマの委員会を立ち上げてく
ださいました。

また二〇〇七年からは二人で
「ユニバーサル社会を創造する事務
次官プロジェクト」を開始し、十
省の次官の参画を得て、毎月一回
十二年間勉強会を続けています。

実は私、財務省の審議会委員も
十七年間務めてるんやけど、昔は
議題にも上らなかつた「障がい者
の就労」が徐々に取り上げられる
ようになり、二〇一八年に、初め
て「建議」に「障がい者も社会の
支え手に」と記述されました。

いま政府が進めている「一億総
活躍社会」「働き方改革の考え方」
に「障がいのある人が在宅でも働
けるようにしよう」という一文が
入り、それを受けて、プロブ・
ステーションの地元兵庫県・神戸
市では、チャレンジドの在宅ワー
クを推進するプロジェクトを予算
化し、動き出しました。

高橋 時代がやっと追いついた。

竹中 これは、国レベルで自分た
ちの活動、訴えが認知されたんだ
と、すごく嬉しかったですね。実
際、これまでプロブ・ステーション
のコーディネートで五百人以上
上のチャレンジドが在宅で就労し
いま彼らはデザインやシステム開
発などで活躍してくれています。

新しい発想をするには 情報をグレイで集める

竹中 政代さんは、目の治療の新
しい世界を切り拓いてきたわけで
すが、その発想力は一体どこから
来るものなの？

高橋 一つは情報に自分で白黒つ
けないということでしょうか。

多くの人が、この人はよい人悪
い人、これは正しい正しくない
か、最初から物事に白黒をつけて
判断してしまいがちなんです
けれど、それだと情報が全部削ぎ落とされ
て、大事なことを見落としてしま
う可能性があるんですね。障がい
者も同じで、多くの人が最初から
障がいがある人、障がいがない人
と分けてしまうから、大事なこと
が全部削ぎ落とされてしまう。

竹中 まさにそうですね。

高橋 だから、私はよくラポで
「情報はグレイで集めなさい」と言
っているんです。この論文のこの
データは何割正しい、これは何割
正しくないという感じで情報を集
めていくと、次第にグレイの濃淡
が重なって行って、ある時、これ
は正しいと思える、白く抜けてい
るところがびゅーっと見えてくる

瞬間があるんですよ。

やっぱり、科学者の神髄は初め
から白黒つけずに疑うことであっ
て、最も疑うべきは自分自身の考
えなんですね。この考え、仮説は
正しいかどうかをあらゆる角度か
ら批判してみないといけない。

竹中 それは政代さんの研究者と
してのセンスやね。センスの悪い
人は、なかなかそれができない。

高橋 あと、学生には「専門領域
が二つあるといいよ」といつもア
ドバイスしています。違うものを
組み合わせると、必ず新しいもの
が生まれるんですよ。私の場合で
も、脳の基礎研究をする研究所に
専門の違う眼科医がいったから新
しい発想が生まれた。話題になっ
たピコ太郎さんの「PPAP」と
一緒だと思います。ペンとアッ
プルをくっつけるんです(笑)。

竹中 私はそれを人と人、人間で
やりたいのよ。私は自分のことを
「人と人とを繋ぐメリックン粉」「翻
訳マシーン」って言っているんだ
けど、人と人とが繋がることで違
うもの、新しいものが生まれてく
る、それがすごく好きなんよ。

高橋 人と人が繋がった時、最も
大きな可能性が生まれますよね。